なぜ英語が話せないの

〈59〉

会話上達法＝第三部＝

イエス、ノーもはっきり
明確な表現を鍛錬

かつて米国大使館の友人（アメリカ人）が「日本に来て寂しいのは、ディベート（論争）がないこと」と、話したことがある。

日本人は反対意見を述べることを嫌い、少なくとも建前は「ごもっとも」で終わる。「わざと相手を刺激して、反論させようとするが、こっちの言い分がスッと通ってしまう」。

これが英語になると、理屈っぽくなる。「イエス」か「ノー」を明確に言わねばならない。日本語なら可能性の程度を「だろう」と、すれば足るが、英語ではそうはいかない。

絶対の可能性ならcertainly。それからprobably、presumably、possibly……と続く。数年前、米国首脳が〝possibility of use of nuclears exists〟と発言したら「核兵器が使われるだろう」と訳されてしまった。possibilityは確率的に非常に低いが、日本人は「だろう」以外の発想がない。

元NHKテレビ会話講師の松本道弘さんは「私の英語体験」の中で、こんなことを書いている。

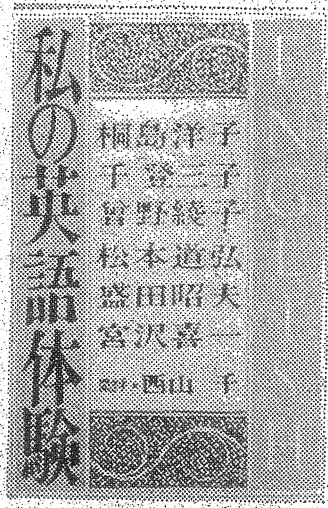
帰国するアメリカ人に「（また）日本に帰ってくる？」（Will you come back to Japan?）と聞けば「Maybe」（多分ね）で終わってしまう。「What are the chances of your coming back to Japan after leaving here?」という形にすれば「Fifty percent」や「Twenty percent」などと答える。

同時通訳の西山千氏によると、日本人は中間的でいまいな表現を好む。「ちょっと貸してください」。「（食堂の客が）ご飯くれる？」…。いつも決断は保留しているので、国際会議では外国人との間で誤解が生じる。

日本人に欠けた論争性や表現の明確さを鍛錬するには、ある一つのテーマについてグループを二派に分け、それぞれの立場を決めて論議するのも一つの方法である。大学のESSクラブなどで、よくやるが、論理的なモノの考え方、主張に役立つ。

この〝論争ゲーム〟で大切なのは、自分の立場に最後まで責任をもつこと。それから本音と建前を使いわける日本式発想を絶対にしないこと。松本さんは、欧米人と話をする場合、ある程度のこうしたルール意識を持った方がいいとアドバイスしている。

例えば、アメリカ人が「日本人は非人道的にイルカを殺す」と批判する。日本人としては「非人道的でない」と言うのが論争で「米国も同じことをやっているじゃないか」ではケンカになる。日本的発想は改める必要があると、松本さんは強調している。



松本さんら6人の英語学習法が紹介された『私の英語体験』